

## 政治の言葉を超えて南京事件は語り得ないのか

森 和也

## 作用と反作用

在米華人の作家アイリス・チャン (Iris Chang) は、一九九七年、英文で南京事件を正面から扱った初めてのノンフィクションをアメリカで上梓した。

アメリカにとっての第二次世界大戦とは、二つの大洋のむこうのドイツ、日本との戦いであり、そのさらにむこうのアジアにおける日本と中国——アジア人同士の戦いは背景に過ぎなかった。アイリス・チャンは「忘れられた」と呼んでいるが、それは忘れられていたのではなく、彼女が義憤を込めて書いている通り、関心がないのである。むしろ「見捨てられた (forsaken)」とするべきであっただろう。虐殺から多くの中国人を救った南京安全区国際委員会を組織した欧米人たち

が、戦後、英雄として遇されることはなかった。

アメリカは初めてアイリス・チャンの『ザ・レイプ・オブ・南京——第二次世界大戦の忘れられたホロコースト (The Rape of Nanking: The Forgotten Holocaust of World War II)』で南京事件を知り、その衝撃はベストセラーとなった。

一九七〇年代以降、日本では、南京事件はなかった、あるいは、あっても「大虐殺」と呼べるものではなかったとする歴史修正主義者、いわゆる「まぼろし」派が盛んに論陣を張ったが、それに「歴史事実」派が対抗して、南京事件論争が起こっていた。『ザ・レイプ・オブ・南京』の著作を促したのも、在米華人のネットワークを通じてアメリカにまで及んだ

アイリス・チャン著／巫召鴻訳

ザ・レイプ・オブ・南京——第二次

世界大戦の忘れられたホロコースト

四六判 三五〇頁

同時代社「二一〇〇円」

巫召鴻著／山田正之解説

「ザ・レイプ・オブ・南京」を読む

四六判 一九二頁

同時代社「一、五七五円」

この論争の影響である。海外に伝わる情報には得てしてバイアスがかりがちであるが、アイリス・チャンが耳にした情報も、官民一体となって日本が南京事件を「忘れられた」ものにしようとしているというものであったのであろう。行間には彼女の苛立ちが見え隠れしている。むしろ彼女の情報源は世界抗日戦争史実維護聯合会といった在米の華人活動家たちだけではない。ハーバート・ビックスやデイヴィッド・バーガミニといった礼付きの《反日主義者》も、彼女に示唆を

与えている。皮肉なことだが、日本で「まぼろし」派の活動がなければ、この本は生まれず、アメリカでは南京事件は今でも「忘れられた」ものであったかも知れない。

『ザ・レイブ・オブ・南京』は刊行当初から日本でも関心を持たれ、翻訳の話も進められていたが、「まぼろし」派は当然のこととして、本来は味方の側の「歴史事実」派からも、記述内容の正確さについての疑問が提出されていた。そのため翻訳を予定していた出版社からアイリス・チャンに修正意見が出されたが、彼女の側がこれを拒絶したため出版計画は頓挫した。その結果、南京事件に関心はあるが、英文の原書を読むことのできな日本人の間では、アイリス・チャンと『ザ・レイブ・オブ・南京』は、両派が源流となった虚像の中にあつた。

ようやく二〇〇七年になって、同時代社から『ザ・レイブ・オブ・南京』の翻訳が出ることになった。以前、出版を頓挫させた記述内容の疑問点については、翻

訳者の巫召鴻氏が『ザ・レイブ・オブ・南京』を読む」で、その一つ一つに反論なり補足なりを加え、時には巫氏自身が疑問点を指摘している。アイリス・チャンを弁護する立場にあるのは当然であるが、巫氏の筆致は抑えたものになっている。本来ならば巫氏ではなく、彼女本人からの反論が望ましいのだが、二〇〇四年に不幸な死を迎えたため、それは叶わない。

「まぼろし」派である歴史修正主義者にとって肝心なのは歴史の「事実」そのものではなく、栄光ある日本という「真実」を汚す事柄を排除することであるため、「歴史事実」派がいくら資料に資料を積み重ねたところで、南京事件論争は果てることのない神学論争になるしかない。

そのうえ、「まぼろし」派は反日勢力の陰謀を、「歴史事実」派は右翼勢力の陰謀を言い出す始末で、論争は学問の域外にはみ出してすらいる。不毛とは言わな

いまでも、どちらかが力尽きるまで終わらないことに付き合うことは、巫召鴻氏の懇切な解説に任せ、私は『ザ・レイブ・オブ・南京』を論争の書としてではなく、虚像を取り払った一つの文学作品として読んでみたい。

ノンフィクションとプロパガンダとの間にアイリス・チャンは、「エピソード」の結びに記された、公式な謝罪をし、犠牲者に補償し、子供たちに「虐殺の真実を教育する」という、聞き慣れた政治的要求を日本政府にするために、この本を書いたのだろうか。そうだとすれば、単なるプロパガンダの本であるに過ぎない。しかし、プロパガンダとしてはひどく混乱している。その混乱を、好意的に読み取れば、それは文学的であると呼んでも良い。

「序」で、この本の第一部が黒澤明の映画『羅生門』の原作となった芥川龍之介の『藪の中』に着想を得ていることを明かしている。南京事件の藪に現れるのは、日本人、中国人、そして現場に立ち会うことになった欧米人である。この三

つの視点から南京事件を描こうとしているのだが、芥川の『藪の中』のように真相が藪の中にあることはない。視点が複数あるというだけで、日本が加害者であり、中国人が被害者であることは揺るがない。しかし、この成功したとは言えない試みが単なるプロパガンダとなることからこの作品を救っている。日本軍の暴行を弾劾しながらも、視点は時として揺れ動く。

東京裁判において南京事件に関係して絞首刑となった被告は松井石根と廣田弘毅の二人であるが、このうち中支那方面軍の司令官として現場での責任者であった松井大将に対して、アイリス・チャンは、当初は虐殺の事実を知らず、知った後もそれを止めることができなかった無力で哀れな男として描いている。むしろ彼女の弾劾の視線は、東京裁判でアメリカの政治的判断によって免責された、形式上は松井の指揮下にあった上海派遣軍の司令官朝香宮鳩彦王中将に注がれており、さらにその高貴なる血筋がつらな

る昭和天皇の責任に向かっている。彼女は自らに有利な資料の圧倒的な不足を前にしながらも、戦犯に指名されることなく、戦後を安逸に暮らした天皇と皇族の戦争責任を印象づけるよう執拗に食いつがる。彼女が戦前の日本の政治制度に對しどれほどの理解を持っていたのかわからないが、主権者の責任が追求されなかったことは、在日華人の彼女ならずとも、外国人には理解しづらいことなだろう。我々はこうした視線の存在を知っておく必要がある。

日本が加害者であることは言うまでもないが、アイリス・チャンの視線は、在米華人として、本国政府に対しても容赦はない。稚拙な戦争指導を行い、首都南京を捨てて逃げ出した国民党政府が批判されることは彼女以前からもあったが、彼女は、中国においても南京事件を「忘れられた」ものにした、中華人民共和国政府にも批判の眼差しを向けている。冷戦と文革の時代、鎖国状態にあった中国から、南京事件の被害者の肉声が聞こえ

中国発行の日本語月刊総合誌

# 人民中国

People's China 9月号

人民中国雑誌社 定価400円(税込)  
[年間購読料4800円(税込)]

【「グラビア特集」  
オリンピック◆  
ハイライト◆パ  
ラリンピックを  
前に——自立す  
る障害者たち◆  
「レポート」被  
災地を支える四  
川省の省都・成  
都の矜持「連

載」大メコンに生きる③希望の種・  
イネに歌う◆太極拳よもやま話⑧楊  
式太極拳の伝承◆24回フットエッセ  
イ・慈覚大師円仁の足跡を訪ねて②  
廃仏毀釈◆世界遺産めぐり⑤雲南省・  
石林県——大自然の創造した岩石原  
生林・石林◆映画のセリフで学ぶ◆中  
国語⑥小さな赤い花(看上去很美)◆  
放談ざっくばらん・倭人・倭人文化  
の謎◆快樂学唱中文歌・那年夏天<sup>ほか</sup>

「人民中国」は中国で編集・発行される日本語雑誌です。政治、社会、考古、歴史、美術など幅広い分野の最新情報を満載。  
ご希望の方に見本誌を送りいたします。

〒03(3937)0300 東方書店

ることはなかった。その上、恩人であるはずの南京安全区国際委員会のメンバーたちは、外国人であるという理由で中国から追放されてしまった。

『ザ・レイプ・オブ・南京』が、その《悪名》にかかわらず高く評価されているのが、南京安全区国際委員会の代表であったジョン・ラーベの日記を「発掘」したことである。アイリス・チャンは、ラーベのほかに、南京安全区国際委員会のメンバーとして医師のロバート・ウィルソン、女性教育者ウィルヘルミナ・ヴォートリンという二人のアメリカ人を登場させているが、あるいは、これは自国のこと以外にあまり関心を示さない一般のアメリカ人読者に南京事件についての興味を引かせるための方策であったかも知れない。しかし、ラーベはアメリカ人ではない。南京在住のドイツ人で、ジーメンス社のビジネススマンであり、ナチスの党員でもあった。南京安全区の委員長であった時、ハーケンクロイツは、同盟国日本に抗して中国人を守るための切り札

となったが、戦後、ラーベを歴史から消し去るものでもあった。いや、それ以前に、同盟国日本に抗したことで、ナチス政権下のドイツに帰国した後のラーベの運命を不遇なものにした。彼女の関心は、ジョン・マギー牧師が撮影したフィルムの行方を捜すことが起点だったかも知れないが、その結果、「忘れられた」ドイツ人の日記の「発掘」という成果に行き着いている。第三者である外国人に紙数を割り、南京事件にかかわった者すべての運命を描いたことは、彼女の意図に反してかどうかは知らないが、特定の時、特定の場所で日本人が中国人に行った残虐行為という単純化から南京事件を救い出している。戦争における人間の運命は普遍的な問題である。

ノンフィクションとして読むのなら第一部と第二部だけを読めば良いのかも知れない。第三部は政治的な文章であり、ノンフィクションとしては読むに値しないし、本書の副題の「忘れられたホロコースト」という名を持つ章であるとしても、

この本の価値をひどく下げているように思える。政治の犠牲者たちを描きながら、まだ政治に救いを求めるのか。それに比べ、第一部・第二部に登場する日本人、中国人、そして欧米人たち、南京事件にかかわった人々の運命は、戦争という極限状態で善と悪との単純な二元論では計り切れない人間の内なるものを照らし出している。南京事件の真実を訴えたいのなら、政治的な主張を抑えて、アイリス・チャンが知った南京での出来事ありのままを書いたならば、ノンフィクションとして歴史を越える力のあるものになっていたかも知れない。しかし、『ザ・レイプ・オブ・南京』はノンフィクションとしてもひどく混乱している。ノンフィクションと見るには、あまりに政治的な言葉が饒舌で、また直接的であり過ぎる。そこからは文学的な鳶尾花<sup>アイリス</sup>の芳香は香らない。(もり・かずや 財団法人東方研究会)

